

土 淨



六月號

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可
昭和二十一年四月二十八日運輸省特別掛承郵務第三五二號
昭和三十一年五月二十五日印刷
昭和三十一年六月一日發行

第二十二卷

第六號

宗 歌

月かげの

いたらぬ里は

なけれども

ながむる人の

こゝろにぞ

住む

目 次 (五重號)

卷 頭 言 (1)

念佛の意義 阿川貫達 (2)

五重のお話 宮林大廉 (7)

—念佛の生活—

地方の五重相傳會 福富海岳 (15)

童話を家庭へ 内山憲尙 (19)

靈場今昔 根本曾代子 (20)

生ける念佛行者宮川翁 辻 昌 瑞 (21)

ホノルル通信(第四信) 松濤弘道 (24)

尾陽の生んだ名僧の數々 大橋俊雄 (26)

祖法然上人の歌 澤田岳潤 (29)

卷頭言

大勢の人が、一つの、共通の悲しみを抱いて、肅然と坐っている。静かな讀經の聲が、香爐から立ちのぼる煙にのつて、式場一帯に漂っている。若い女性の死がかもしれ出す、悲しみの中の一抔の華さが匂っている。カツカツと靴音を立てて、若い、まだやつと二十前後といった男が寺門を入つて、まづすぐに、正面の焼香臺に進み寄る。黒いリボンで飾られた寫眞の中で、亡つた愛人が彼をみている。若い男も、ちつとそれを見つめる。つと、その腕をのぼして香（映畫では香爐）をつかむと、力一杯寫眞に投げつける。スワと腰を浮かした列席の大人達に向つて「あんたたちには何もわからないんだ」。そう投げすてるようにいうと、足早やに去つて行く。その後姿が小さくなつて行く。

目下やかましい「太陽の季節」のラスト・シーンである。小説で讀んでも、映畫でみても、どうもピンと來ない。「わからない」。それは筆者が「おとな」だからだろうか。しかし、わからないといつて、つづばなしたのでは、ますます、若い世代とかけはなれてしまう。よくいわれるように、信仰とか宗教とかが若い人々に入れられないのは、おとなの信仰をそのままの形で押しつけるからである。新興教團が比較的若い信者を集めているのは、若い人に受けいられる形につくりかえているからである。それには、今の若い世代が何を考え、何を求めているかを理解しなければならぬ。いくら考へ方、感じ方がちがつていても、根本的には彼等も矢張り「人間」であり、時代と環境の子なのである。それだからこそ、おとなの前では香を投げつけてみせもするが、心の底から溢れて來るのが、人知れぬ涙となつてその目に光るのである。「わからない」のはその言葉や動作であつて、一皮むいた眞裸の魂には、何等ちがいのない人の子の情があふれているのだ。

おとなは自分の子供の頃のことを忘れがちである。人間の記憶は仲々うまく出來ていて、自分に都合の悪いことは、早く、忘れてしまふように出來ていると、或る心理學者はいつてゐる。今のおとなにも、かつては「太陽の季節」があつたのだ。そして、今の宗教も、かつては老若をとわず、萬人の胸にせまるものを持つていたのだ。それを再び、新しい形につくりなおすこと、これが「おとな」の宗教のしなければならぬといつとめである。（竹中）

念佛の意義



阿 川 貫 達

一

私共が朝夕の勤行の時先ず香偈三寶禮の文を稱へる。即ち香を獻する偈文願我心淨如香爐等と唱へ、次に佛を禮し法を禮し僧を禮する。佛教では完全なる人格者即佛陀を信じ、その所説の法は眞正の悟りの道であると信じ、その聖弟子達は正法を傳道するものと信ずる。是を三歸と云い、又是等を三寶として尊崇するのである。その第一の佛を禮するのは念佛に通ずる意がある。即ち釋尊が成道して五比丘を濟度し、教團成立の際三歸を耶舍父母に授けた。その歸依佛は念佛の起りとなつたのである。

こゝに念佛に就いて少し述べる。釋尊が御在世の時は弟

子等が煩悶を訴へて一々懇切な御導きに依つて、又その慈眼を見、愛語を聞き奉つて煩悶も解け、歡喜雀躍頗る輕安の思ひであつた。ある者は煩悶を申さずしてあの光顔巍巍たる御顔を見奉つただけで、もう煩悶が雲消霧散したのもあつたであらう。釋尊は常に吾人心靈の所依となるべきものは自燈法燈なりと説かれた。ところがこの世間眼一切智者の釋尊も八十歳御臨末に際し、常隨給仕の弟子阿難が釋尊との別離を哀んでやまなかつたのに對し慰めて云はれるには、吾常に教へた如く自燈法燈によれば生滅無常の事實に驚くことなはいと教誡せられた。その法燈と言うのは佛陀悟りの正法で佛の教法を言うのであり、此の正法に依つて世の迷の闇冥を照破すること、恰も燈火が照暗の作用

あるに喩へて法燈と言うのである。自燈は己れに依る燈明と言う事で、自らを清くして自己そのものを全現し、其の本性に相應するもので、自己の信念であると言ひ得る。此の自燈法燈は釋尊に於て統一されて居るが、今此の自燈法燈の合一者たる釋尊入滅の後は、弟子達はその教法の法燈に依止して自己の信念である自燈との合一を望んで法燈確立の結集が行はれたが、又他面佛陀に歸依し、佛陀を世尊として佛獨特の徳なる十八不共法の體現者とし完全なる人格者として、その偉徳威神を禮讃渴仰し奉つた、その不滅の佛陀に直參して轉迷開悟慈悲救済の本所に進趣せんとするに至つたであらう。是が佛を念じ佛と冥合してその救済を頂戴するに至るので念佛是であると思う。雜阿含經の第三十三には佛を念する時貪瞋痴起らず乃至遂に涅槃すると三念（念佛、念法、念僧）を説く中に念佛を述べて居られる。念佛は三念六念十念等の隨一で早く阿含の中に説かれたもの、或は佛に對する感謝報恩の念となり、或は怖畏を除き危難を救い、或は不生惡趣の法生天の法入涅槃の道と云はれるに至つた。

佛教徒は先づ佛陀に歸依し佛を信じ佛を念すべきである。

二

念佛に種々ある。普通には實相念佛、觀想念佛、稱名念

佛の三である。實相念佛は佛の法身中道實相の理を觀するので眞理を觀想するのである。今は略説する。次の觀想念佛は觀念の念佛と云はれ稱名念佛は口稱念佛とも云はれる。こゝでは觀念の念佛即ち觀佛と口稱の念佛とを述べる。觀佛と云うのは佛の無上菩提を觀するのである。此のお悟りは佛身に具現されている。即ち此の佛身を觀するのである。觀無量壽經の意によるに佛は法界身（法界は衆生を意味する）で佛の身心は衆生の世界に遍滿して自由自在無障礙である。衆生界を救済するの身である。若し衆生が諸佛を見奉らんと願すれば即ち佛は無碍智を以て是を知り能く衆生の念想の中に入り給うのである。衆生の夢の中に佛見え給う如き是である。即ち一切衆生佛を觀想する者には即ちその心中に入り給うのである。衆生の爲の身なれば觀想せざる者の心想中には現せず、觀想さへすれば入り給うのであると云うのである。その佛と衆生と感應道交の處を曇鸞大師は、衆生が心に佛を想うとき佛身相好が衆生の心中に顯現する、譬へば水清き時は邑像現じて水と像とは一ならず又別異のものでもない如くであつて、是を佛の相好の身が即ち吾人の心想であると言はれた。觀經に「是心即是三十二相」とある。三十二相は佛身を意味する。即ち是心即佛身の意と言はれるが、その是心即佛の即の字を不二の即と見ないで、即とは不離の意味で佛と相離れない所を言うのである。我が心全く佛と言うのではない。我が心

を指して直ちに佛とは言はないのである。

觀佛に就いては天台等の諸師と善導大師とは理と事と見方が異なる。今は善導大師の事の御意によつて述べるのである。是心とは我が心に佛を想う時を言うのであり、卽是とは我が心に佛を想う時卽ち我が心中に佛を觀るを言うので、是れ佛と我が心と不離なるが故である。是を卽と言うのである。譬へば器物に水を汲みおくに水靜なれば月が浮ぶのである。その時水卽ち月かと思へば水に月が現するが如くである。器物は衆生の身である、水は心である。月は佛の身を意味するのである。今も衆生が心に佛を想う外更に佛はないのである。これ水を離れて佛あることないと同じである。是が卽ち卽心卽是三十二相と云はるゝ所以である。

このような事を觀佛と云うのである。是は衆生の心水が靜止して居らねば清淨なる月は宿らないので吾等の散亂動搖の心ではなか／＼むづかしいのである。

次に口稱の念佛は是れ淨土宗で言う所の念佛で、たゞ阿彌陀佛の人類救済の御誓い本願を信じて心には助け給へと思ひ、或は有り難しと思ひ口に稱へる念佛なのである。

三

淨土宗の念佛は阿彌陀佛を信じてその名號を稱へるので

ある。阿彌陀佛が止むにやまれぬ大慈悲を以て人類を平等に救済する、卽ち我を信じ南無阿彌陀佛と稱へる者は、必ず極樂に往生せしめんとの本願の御誓いに信賴して、念佛を稱へるのである。その阿彌陀佛を信するに就いて三心と云う大切な心構へがある。三心と云うのは至誠心と深心と回向發願心とである。至誠心と云うのは眞實で心誠の心である。吾人の所謂誠心誠意である。深心と云うのは信心である。どう信するかと云うに、自分はこれ罪惡の凡夫で取りすました修行などはとても出来ないもの、普通の教では永久に救はれないものであると信する、この自分を無價値と信するのを信機と云うのである。この自覺の上に阿彌陀佛こそこのような拙き我を救い給う佛であるとして、その本願のありがたさを信するのである。回向發願心と云うのは極樂に往生したいと願う心である。我等のなしたさゝやかな善行爲や念佛を以て往生したいと願う心である。

かく云へば三心は大變むづかしい安心卽ち心の持様であるようであるが、そうでもないのである。是を一言で云うならば阿彌陀佛を信じて助け給へと思ふ心、忝し有り難しと思ふ心で念佛を稱へるのである。そのような安心で念佛を稱へるならば必ず救つて下さるのである。このような心構の念佛は極樂往生に缺くことの出来ない必須の要件である。

四

念佛する者は必ず極樂に往生する。是が念佛の最大の利益である。極樂は阿彌陀佛の在せる無限常住の理想境である。阿彌陀經には極樂世界は心身に諸の苦痛なき諸樂充滿の世界であると説かれて居る。此の世界に諸の上善人と一所に會合して善根を修するのである。吾人は現に此の苦の世界にあえいでいる。實に盛者心衰愛欲榮花永く保つべからざるの世界である。ところが極樂と云へば彌陀佛の素意味到の聖者法然上人の大經釋（古本漢語燈錄）にその有様を敘して言はれるには、

(5)

極樂に往生するの後身心に諸樂を受け眼には阿彌陀如來を拜見し聖衆を瞻仰せん、見る毎に眼の樂を増し、耳には深妙の法を聞く、聞く毎に耳の樂を増し、鼻には功德の法香を聞いて聞く毎に鼻の樂を増し、舌には法喜禪悅の味を嘗め、嘗める毎に舌の樂を増す。身には彌陀の光明を蒙り、光明に觸るる毎に身の樂を増す。意に極樂の妙境を思い、思う毎に心意快樂である。極樂の一々の境界事物皆離苦得樂を示現する。枝葉華果何れも常樂の響きを傳へる等と言はれ、是則彌陀如來慈悲の御心、念佛の誓願を發して我等衆生に苦を抜き樂を與ふるの心也。と言はれた。私共はありがたくいたゞいて往生を期待するものである。往生は阿彌陀佛の來迎を蒙りその大御心に抱

かれて往くのであると思う。

五

我等が淨土信仰に入るのは種々の因縁に依るのであるが、結局阿彌陀佛の有難さ尊さに魂を打ちふるはしてぬかづくのである。是は阿彌陀佛の光明に照らされて身も心も歡喜に満ち／＼て心軽く身も柔かにこわばらず即心身輕安柔輭になるのである。法然上人は往生大要抄に「心のそみぞみと身のけもいよだち、なみだもおつるをのみ信のおこると申すはひが事にてあるなり。それは歡喜隨喜悲喜とぞ申すべき。信といへるはうたがひに對する意にてうたがひをのぞくを信とは申すべき也。」とある。ありがたさに涙のおつるをのみ信仰を得たと言うのでなく、うたがひのなのが信仰であると言うとき、誰にも容易に信仰をおこし得るのである。

そして入信以後念佛を稱へる時、阿彌陀佛は念佛の聲に應じて現れて我等を影の形を追うが如く護り給うのである。是を應聲則現隨逐影護と言う。我等如き凡夫は是を肉眼に見奉る事は出来ないが、心眼を開けば、即ち信仰すれば是を味い知り奉る事が出来るのである。善導大師は阿彌陀佛と吾等との關係を親縁近縁増上縁の三つに示されて居られる。親縁と言うのは、我等が口常に佛名を稱へれば佛即ち是を聞き給い、身常に佛を禮敬すれば佛即ち之を見給

五重のお話

— 念佛の生活 —

宮 林 大 廉



一

五重とは五重相傳と申して特に變つたお話をいたすわけではありません。本來清規に準じておつとめをいたせば一週間寺にお泊りを願ひ、如説修行、説いた事をその場で實行をして、念佛生活とはかゝるもの之れが直實な人間生活であり正しい信仰生活であると強いられてゐなく心から納得して頂く淨土宗では最も大切な修養會であります。

お互に日常生活の上に憂き事の多い世智辛い世の中を正しく道を守り生きて行くのは容易な事ではありません。現在社會狀勢を見るに思想界は混亂頽廢して不正行爲や暴行事件此機に乗じて新興宗教は流行しており、誰もが之れではならんと嘆息せぬものはなく、何か思想界の目標を確立

し本當に現代人を救う眞の宗教により、判つきり心の眼を開き、自信ある正しい信仰をもち足を大地につけた生活を誰もが望む事です。

申す迄もなく淨土宗は、勿論その源はお釋迦様のお口より流れ出で阿彌陀如來の御本願念佛に興り淨土三部經の説相に顯はれているのでありますが、それが、印度では馬鳴菩薩、龍樹菩薩、天親菩薩、菩提流支、支那では、曇鸞大師道綽禪師、善導大師、のお三方次第に相承して我朝法然上人に傳へられ、二祖聖光上人、三祖良忠上人、寂慧上人、蓮勝上人、了實上人、了譽上人と次第して参りましたが此七代了譽上人に至つて始めて五重と云う標幟を掲げて傳法いたす事になりました。

然しながら七代様が新しく御つくりになつたかと云へば

そうではなく傳える法文の骨子には變りはないので、それまでは唯傳法とのみ云うて五重とは云わなかつたのです。それが何の必要あつてかゝる事を唱導されたかと云へば、淨土宗の教へを、誰にでも直ぐ納得のできる道はと、當時只今の鎌倉大本山光明寺三代良順上人と御相談の上御苦心あそばされ、淨土の法文を一まとめにして、五通にとりまとめ本末口傳を明かにせられたものであります。

今此處に道を求めんとするに最も大切な要件は、法と機法と時代、相應と云う事です。こゝに法然上人御開宗當時を顧るに、史上に見ても、保元平治の大亂の眞只中、子が父を斬り、兄弟相殺し、同族相食む、破倫無常莊涼慘憺たる時代相であり、今一つには凡夫大衆救済という事を目安にしておらるゝ點で、宗教は一人や二人すぐれた人の成佛を目的とするのではなく、人間であるなら誰でも、世界にみち／＼ておる生に喘へぐ大衆を救済するという事がお目當でなければなりません。

清濁併せ呑み、衆水海に入つて味一つ、で善惡賢愚の差別なく救わるし道之れが、お釋迦様の御本懷であらねばと御着眼なされたのであります。

又七代了譽上人の御時代も戰國時代血腥き風吹き荒ぶ中ゆる／＼教化說法をしておる暇さえなき有様、一日も早く一般國民に力強く人生を送り、安心せしめる道はと、五つの御書物を御撰びになりましたのです。

此處に特に申上げておきます事は、法然上人御遺訓一枚起請文の中に五重一々の御卷物の尊い意味あいが教へられ

ておりますので、言葉をかえて云へば、一枚起請文の御精神をお話下さると云うてよいのです。

二

御書物の御名前は、

初重往生記 法然上人の御作

二重末代念佛授手印 二代聖光上人御作

三重領解末代念佛授手印鈔 三代良忠上人御作

四重 決答(授手印)疑問鈔 三代良忠上人御作

第五重 口授心傳十念の傳法 往生論註曇鸞大師御作

此五卷の御書物であります。

初重往生記は、機と御相傳になつております。往生とは文字通り古徳が「往生とは死ぬる事には候はず、往いて生れると書いて候」と教えられた通り死ぬ事でも縁起の悪い事でもありません。然らばどこへ往いて生れるかという極樂へ生れる事です。極樂も文字通り「阿彌陀經には、もろ／＼の苦しみある事なく、たゞもろ／＼の楽しみのみをうく故に極樂と名づく」とあります。人生の悩み苦しみを去つて楽しみづくめの處へ生れることであり、又御淨土へ生れるとは此穢れの多い國土を去つて淨い國土に生れることです。一時も安心の出來ぬ悩みの多い不安の國土を去つて、心安らかな平和な國土に生れる事です。こんな有難い仕合せな事はないではありませんか。

或る時、大僧正が、極樂地獄の有無の質問に對して「極樂はあるのだと信じておる人にはある」「極樂などあるもの

かと云う人には極樂はない」「地獄などはないと思つて勝手氣まゝに惡事をなしておる人には地獄はある」「地獄と云うおそろしい處があると信じておる人にはない」とお答えになつたのをお聞きいたし實に妙味のある御言葉と拜聽いたした事があります。又御淨土の存在は現在も未來もないわけで、お念佛する人の現在が御淨土で、凡夫のために西方とおたてになつたので、時間空間を超越した處に、御淨土も極樂もあるのであります。初重は機と傳うとなつて機とは器と云う事で、如何なる力ある人が極樂淨土に往生が出来るか、淨土宗の教えは信仰に入りますには神佛がましますかと信する先に自己自身を信心するということが信心に入るか第一歩で最も大切な事としております。自分は信仰をもつ必要はないか。宗教なしに大人格者になれるものか先づ自己自身を深く、ほりさげて反省をして見る。自己を信する事、胸中に潜めるこの貪瞋痴三毒煩惱に打勝つ事が出来ず、國を治める力ありても、我煩惱の前には勝ち得る力なく、罪に罪を重ねておる自己の罪惡を省み、又世の無常をよく／＼觀するに人の肉體には長命すれば、老衰疾病という事あり之れを癒す力はあるつても病まぬ身體にする力はありません。特に死の岸頭にたてば萬事休すで、世界唯の一人も死からのがれるものはありません。此の自己の力なきをよく／＼反省する事が最も肝要であります。但し素直に正しく受取り得ればよし、さなく萬一にも聞き損ないがあれば寒中汗の流れるほどお念佛を申しても救われぬぞと、法然上人のお氣付きが、「難逢往生機就レ此有其十

三人」「種々念佛往生機就レ之有其廿六人」とお擧げになつておりますが、餘り煩鎖になりますから御親切に、結前生後、とて詰まる處四つに納まるぞよとて、四障四機、と云うを御示しになり、

四障とは、疑心、懈怠、自力、高慢

四機とは、信心、精進、他力、卑下

此四障と云ふ悪い心をとりのぞき、四機の心になりおうせさえすれば、どんな賢い人でもどんな愚かなものでも救われて行くぞとの御教え之れが初重の大體であります。之れが入信の基礎となるべき事で御納得が出来ぬと、之れからおはなしが、身につかず實を結ばん事になりますので、實例を擧げてお話申し上げてみましょう。一番御わかりが早いと思いますので。

當時智慧第一でなりひゞいておつた、法然上人廿餘年の間、自己の智慧をたよりに一切經を五遍迄も御覽になり、木曾義仲京都亂入の一日だけは餘り世間がそうぞうしかつたため、聖經をひもとく事ができなかつたと迄云われておる大學者であり、大智慧者、大徳者の上人が、生死の問題には、自己の學問、智慧、徳にも見かぎりをつけ、烏帽子もきざる男なり、十惡の法然坊愚痴の法然坊がと、我が總ての力を捨て、聖道門の修行は智慧をきわめて生死を離れ、淨土門の修行は愚痴にかえりて極樂に生るゝなり。もし智慧をもちて生死を離れべくば、源空いかでか、かの聖道門を捨てゝこの淨土門に赴くべきや、とおなげきになり又、人の命は食事の時むせて死する事もあるなり、南無阿

彌陀佛とかみて南無阿彌陀佛とのみ入るべきなり、の御言葉。あの善導大師散善義の御父、

一心専念彌陀名號一行住座臥不問三時節久近一念々不捨者是名三正定之業二順三被佛願二故。

の僅か三十四文字を拜讀し感激せられ、生死の問題は、智力に不非、佛力による事に氣づき、之れなるかなと、天に仰ぎ地にふして悦ぶべしと泣かんばかりの御悦び直ちに念佛一行に歸されましたあの御信仰。

又有名な熊谷次郎直實の入信の際に、法然上人の御庵室にお訪ねして、どうしたら往生ができますかと、おたづねすると、法然上人、たゞ念佛さえ申せば往生させていたゞける別の仔細はなにもない、と答えられると、直實が、さめざめと泣き出した、何故お泣きなさるのだ、と上人おたづねになると、直實、お前のやうな罪の深いものは手足を斷り、生命を捨てゝこそ往生ができると云われるかと思つたのに、あまりにも易々と念佛さえ申せば往生できると云われたので、嬉しくて泣いてしまいました。と彼の一の谷の合戦で悴小次郎が討死をし、同じ年頃の敦盛を打ち取つて無常を感じ自分半生の罪惡の深きに氣づき、世の無常を感じたとは申せ卒直に一切をうち捨てゝ念佛一行に歸せしあの心情。

之れを私共がまじめに自分現在の心境によく／＼反省をいたし、引きよせ考えた時、誰か、救いを求めんでおられましようか。

此初重の御卷物を一枚起請文に載くと、

念佛を信ぜん人はたとへ一代の法をよく／＼學すとも一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無智の輩に同じうして智者の授るまいをせずして唯一向に念佛すべし。と御訓へ下されてあります。賢人も愚人も同じ心になつて申すことです。

三

二重は末代念佛授手印「行」とお傳えになつております。即ち念佛申すものの必ず實行せねばならぬ事がらをお示し下されたのであります。

五種正行を、

- 一 讀誦正行、聖經を拜讀する。
- 一 觀察正行、心の眼を開いて何事も觀る。
- 一 禮拜正行、身と心で御敬いをいたす。
- 一 口稱正行、御念佛を申す。
- 一 讚嘆供養正行、御佛のお徳を讃へ、眞心ある御供養を申しあげる。

何れも御佛のお救いを求めるには大切な行いですから、正行と申します。要は四番目の口稱正行お念佛を申す事が要なので前の三後の一は念佛を勵ますための行なれば之れを助行と名づけております。

それでは、念佛を唱へればどうして救われるかと云うに六字の名號は陀羅尼ですから、「六義不翻」と申して一方の意味を譯すると一方の意味が隠れるから其まゝ唱へるの善導大師は強いて譯して、南無は歸命、阿彌陀の三字に

は無量壽、無量光の深義があると述べになり、阿彌陀經には、此二義の尊い譯を御親切にお説きになつております。法然上人は一層わかりやすく鮮やかに、

南無阿彌陀佛とは別したる事には思ふべからず、阿彌陀佛我を助け給へと云ふ詞と心得て心にも助け給へと思ひて口に南無阿彌陀佛と唱ふるを三心具足の名號と申すなり

と仰せになりました。子が親を呼ぶ聲だと心得此一聲の中には、無限の情愛がこもつております。蒔柿も甘柿になる寒さ哉、でおこる煩惱の中から、お念佛を唱へておりますれば自然精神も淨化せらるゝといえましょう。

彼の税所篤子刀自は、不遇の人であつたが幸い良き夫を得、子供もありましたが最愛の子供、杖柱とたのむ夫に、死に別れ、よく／＼御考へになつた末、こいしい花の都京都を去つて、御主人の郷里、鹿兒島に歸りあの六つかしいお姑さんに使われましたが飽く迄孝養をつくして、

佛にもまさる心と知らずして、鬼婆々なりと人は云ふなり。

朝夕のつらき勤めも御佛の人になれよの恵みなるらん。と歌われ、涙の中にお念佛の信仰に蘇り、如來大悲の懷ろに抱かれ、悲みを悦びにかえ、苦しみを楽しみに思ひ開いて泣いて暮す境遇を悦んで過ごされ、立派に人としての一生を生き抜かれました。かゝる法悦の境を法然上人は「生けらば念佛の効積り、死なば淨土に参りなん、とてもかくても此身には思ひ煩ふ事なぞなきと思ねれば、生死共にわ

づらひなし」と教へられております。

次に心構えとしては勿論、南無阿彌陀佛を唱へて必ず往生させて頂けると決定いたせばそれでよいのですが、靜かに内容を觀すれば、三つの心のすえ方が説かれてあります。即ち「一至誠心」「二深心」「三回向發願心」であります。

至誠心とは眞實の心、まことの心で淨土門では特に虚假心を忌うので、裏ら表て陰げ陽なたなく大勢の時でも獨りの時でも時間を経ても變らん心をいうのです。

深心とは、深く信じ疑わざる心、一つに我身は煩惱具是せる罪惡生死の凡夫なりと信じ、二つには深くかの阿彌陀佛の御本願を信ずる心です。

回向發願心とは過去現在の身口意業の一切の善根を悉く彼の國に生れんと願う心に回向することであります。かように三つに分けると煩しくなるけれど、つまり我身を投げだし御佛の御誓いを信じ念佛を唱える事に外ならないのです。

次にお念佛を相續する心がけとして、四修 一恭敬修

一無余修 一無間修 一長時修 を説かれております。

恭敬修とは生涯を通じて佛法僧の三寶を身にも心にも御うやまいを申す事を相續する心。

無余修とは余念なく雜行を混へず專一に念佛一行にて信仰を生涯を通じて變えざる心。

無間修とは間斷なく信ずる心、間切れのする事なく生涯を通じて相續する心。

長時修とは初發心より生涯を通じて退轉する事なく念佛一行を相續する心であります。尙念佛を申すにお行儀がきびしくは長續きしないのでそこで稱名相續の仕易いように三種行儀をお教えになつております。

尋常行儀 別時行儀 臨終行儀

尋常行儀とは常不斷全く無條件でどうでもよいようにして申せとの事なのです。要は相續する事が肝要なのです。

別時行儀とは、とかく目なれ耳なれすると疎略になりがちなれば身も心をも勵ますために時々別時を行う事です。

臨終行儀とは臨終の心得は大切な事なれば善導大師は、發願文などに詳しくお説き下されてありますが要は平生より充分注意と覺悟を忘れぬ様に致し、平生の訓練ができておれば、何時臨終に迫ろうとも悠々參らせて頂く事ができ「平生臨終」「臨終平生」と云うのが我淨土宗の相傳であります。こゝに三種行儀の中、特に尋常行儀が一番大切である事を忘れてはなりません。

此二重の御卷物を一枚起請文で戴けば、

但し三心四修と申す事の候は皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ内に籠り候也。

との御示しであります。

四

三重領解末代念佛授手印鈔、「解」とお傳えになりお念佛の趣が能く納得ができました。食べぬ先には畑の野菜食べ、てしまへば我がからだ、榮養をとるに最も大切な菜大根も

食べますと胃の腑に治つて消化せられて私の血となり肉となる如く信仰に入らぬ先はお念佛と自分は別々であります。我がものになりきれば身心共に治める尊い寶、生活の指導原理となつて念佛其まゝが生活、生活其まゝが念佛、念佛と生活が一つになるのであります。

三重を一枚起請文で頂けば、

唯往生極樂のためには 南無阿彌陀佛と申して疑ひなく往生するぞと思ひとりて申す外には別の仔細候はずであります。

五

四重は決答授手印疑問鈔とて、「證」とお傳えになり、良忠上人と、在阿と云う青年僧との御問答安心起行の上の疑問を判つきりとお解答下された御問答そのまゝを御書物としてお殘し下されましたので、疑問の一々に判つきりと御回答下され、特に會得のし易いためにとて、善導大師御苦心の二河白道のお譬えを引いて御説明になつております。

此譬えは北に水の河、南に火の河あり、真中に四五寸の狭い白道あり、獨りの人戰々競々として進む其時東より聲あり、水の河見るな、火の河みるな、行け落ちはせぬ、西方からは、來いよ落としはせぬ、の御親切なる御聲、それをたよりに一心正念に進み、遂に望みの彼岸に到達する事ができたとのお譬え、之れは簡単に申せば、水の河は貪欲、欲しいの心、南の火の河は瞋恚、いかり、の煩惱、兎角私共は常に此等の煩惱に禍いされ、罪を造り、惱まされ、争

いをおこして、此無明煩惱を動因として、苦と罪と濁惡の汚泥の中に、その最後の日迄動ごめいている、淺ましい存在であります。其時東方に聲ありは、教主お釋迦様の御聲、西方の御呼び聲は、教主阿彌陀様のお聲、それをたよりに、救いを求める聲、お念佛を一心にたよとして進み、何の障りなく理想の國土極樂淨土に生れる事を得たと云う御はなし、此世の中に、欲しいといかり、の煩惱がなかつたら如何に現在が、平和な樂土でありましょうか。御話が長く複雑になりますから、其意を汲んで要を申し上げますと、人間の本性の上から見れば、何人も善い事はせねばならぬ、悪い事はしてはならぬ、人様のためにはつくさねばならぬ、と云う美しい心の持ち主であります。然るに實際問題として、日常生活を見るに善い事は退屈、窮屈、眠むく、飽きやすい、反對に悪い事は陽氣で面白い、逃げかくれても、やらうとする有様なのです。思想界はいよく悪化して何とも云へんあさましい有様をあらわしておる事は本來これ程美しい心の持主ばかり寄つておる社會に何故かゝる慘狀を呈するかと云う事ほど、わかり難い精神修養上の大きな疑いはないと思います。今淨土宗の上では私共は阿彌陀様の様な尊い方にしていたゞきたい、淨土に参りたいと願う心、雲晴れて後の光と思うなよ、もとより空に有明の月、雲晴るればそこに月はいますが如く、我等三毒の雲に心の眼が覆はれておりました、阿彌陀様をまのあたり拜み得ないまでの事で、阿彌陀様は、阿彌陀經によれば、本願成就のその時より常に在しまして現に一切衆生を

救いつゝおわします、佛様であります。そこに佛の攝取の恵みは得られるのであります。法然上人は、月影のいたらぬ里はなけれども、ながむる人の心にぞすむ、と一月天にあつて影萬水に浮ぶで同じ姿で映るが外く何十億萬の人の心の上に佛の御慈悲は圓滿にうつらせ給うのであります。斯ようにして、念佛衆生攝取不捨の御慈悲を蒙りますから何とはなしに、清らかな心、朗らかな心と淨化していたゞき尊き人生として生きて行く事ができるのであります。煩惱中にあつて、一切の煩惱に穢されず、現實に御佛の慈悲に感じつゝ心強き楽しい人生を進むのであります。

四重を一枚起請文にいたゞけば、

此外に奥深き事を存せば二尊の憐れみにはづれ本願にもれ候べし。とあります。

六

第五重は口授心傳十念の傳法であります。「信」とお傳えになつております。阿彌陀様の御本願の上では數によるのではなく一聲でも救はるゝのであるが何故十遍と云うか之れは、觀無量壽經に、五逆罪を犯した人の往生の事が示められてあり、その五逆罪の中に父母を殺したと云う大惡人が臨終間際に七轉八倒の苦しみ世界中誰一人として味方になるものゝない大罪人でも、阿彌陀様御一佛はお見捨てなく一心に助けを求め御名を十遍呼びおすがりを申してお救いをいたゞいたと云う事があるので必ず御見捨てなくお救い下さるのです。然し此大惡人が單信口稱本願の名號を

以て助かると云う事は三國傳來傳法の法體といたすものであります。然し御本願は一聲二聲と數によるのではなく一生の間相續したものを御救い下さるのであるから一遍でも五遍でも大往生を遂げさせて頂くのです。要は南無阿彌陀佛と唱えたと云う事が、第五重の眼目であります。之れについて、支那玄忠寺の曇鸞大師が往生論註という書物に五逆の惡人が救われた事につき御親切な説明がしてあり、在心在縁 在決定の三義をたて、御本願の御力が示されてあります。今其意を汲んでお話をすれば、罪はどうすれば消えるか學問があるの金の力では消えるものではありません。又二十歳の時造つた罪は年月を経て七十八十になつたら消えるか、そうは参りません。茲に罪を消すには、懺悔の外はありません。然しながら懺悔すれば罪は確かに消えるに違いないが、仲々むづかしい事で一度懺悔をしたら二度と罪を造らない事にならなければ何の意味もありませんが、人間の心と云うものは浅間しいもので懺悔をいたした下から又罪を犯す、中には懺悔目當に惡事を働くなど、云う邪見な人もある。是れには、明暗の譬えを用い、十年閉じ込められた暗室も懐電中燈の光一つで直ちに明るくなる、それは暗闇を去らして後に光が入るのでなく、暗い真中に眞光を持つて入ると直ちに明るくなる。大惡人の胸の中に念佛を唱へ御佛の御慈悲の光によつて救われるのであります。念々稱名常懺悔、念佛の一聲一聲に罪の生活から罪を離れた明るい光明の生活にお導きにあづかり明るい正しい生活として行く事ができるのであります。

之れが五重を通じて現はれて來ました信仰生活の味いであります。

「從假入空」「入空從假」と云ひまして阿彌陀佛の御繪像、御木像を眞心をこめておがみ御給仕を申上げておる中におのづから心の中の信仰を深く力付けられて來ますから、一月天にあつて影萬水に浮ぶ、信心の水さへあればどんな人の胸にも如來は來り給へ火の側によれば暖かくなるそれは火の暖かみが自分の體のものになる。氷の側によればいつしか氷の冷さが自分のものになる如く、我が心そのまゝに御佛の御慈悲を感じられ罪深き淺ましき心も不知々々慈悲の心に生れ變る溫い力強い親切の生活に生きて行く事ができます。そこにあなたの御救いを蒙つたと云う偉大な法味があるわけであります。

第五重は一枚起請文に頂けば、
もろこし我朝にもろ／＼の智者達の沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず、又學問をして念の心を悟りて申す念佛にもあらず、と御教えになつております。

以上五重の大略の御はなしをいたしましたのであります。が、眞に五重要目の筋書きだけにて、おわかりにならんとは存じますが、信仰の問題は其人の體驗にあります事にて「問われても云はれぬ花の香かな」理論を超越いたした處に法の悦びを頂く信仰の世界がありますので、どうぞ大悲願王阿彌陀佛の御前に直參して光ある念佛生活に更生し力強く如來報恩の御すこしをして頂きますよう御すゝめいたします。南無阿彌陀佛

五 重 ル 本

地方の五重相傳會

唐津市 淨泰寺

福 富 海 岳

準備期間

五重相傳會を勤むる場合相當の準備期間が必要であることは申すまでもない。私の場合今度が最初であり最後であるから私の僧侶としての一生が傾け盡されていることになる。従つて勸誡師の選定が如何に大切であるかは申すまでもない。その結果、山本空外先生にお願いすることを決定したのである。

山本空外先生

廣島大學教授、出雲法隆寺住職、文學博士山本空外先生には嘗て法然上人に關する非常に立派な著書があり、幼少にして出家せられた方でなく正式には極めて最近に出家せられた方であると聞く。而かも特に淨土宗を選んで出家せられたことは、淨土宗に對する深く正しい信仰の所有者であることは勿論、文學博士としての先生の學問上の立場と淨土宗の信仰とが一にして二ならず、今日現存する如何なる宗派の信仰よりも淨土宗の信仰が勝れている許りでなくその信仰によつて立派に救はれておられることが理解される。従つて今日の淨土宗には先生の如き人は一人もおられないことになる。それでお願いすることに問題はなかつたのであるが、併し難關はその説明が學問的であり一般的に理解されることが非常に六カ敷しいのではないかという心

配であつた。けれどもその説明が如何に學問的であり六カ敷しいものであつたとしても、學問と信仰と生活とが三者一枚のものである以上、その説明は必ずや受者の生命に觸れ、深い感動を與え得ることは確實であると信じたのである。そうして五重相傳會を勤むることを決定したのが三十年の一月で、疊替水道引込み諸營繕等を決定して貰つたのが本年の一月で、その寄附を御忌と彼岸の二回に分納して戴くことにしたのである。

入行者の勧誘

それで入行者を勧誘して廻ることが出来るようになったのは三月の彼岸法要が済んでからである。尤も門前及び市内三ヶ所の立看板は三十年の年末からで、御忌彼岸會等の案内状には一戸一人は必ず入行して貰うよう極力勧誘これとめたのである。五重相傳會と書いた立看板の下の廣告文を紹介すると、

死んではならない！

人は死すべきものでなく死なずに往生し還相すべきものである。死は決して人生の自然ではなく死なずに結實して往生することが自然であり正しい。それは人に個性があり必ず達成すべき本願あることによつて理解される。新らしい日本の平和と繁榮は正しい立派な宗教によつて育てられる外に途はない。

かくして彼岸法要後月末までに第一回の入行のすゝめを終ることにしたのである。すなはち五重を勤める上の難事中の難事は入行者の勧誘であつて、決して容易なことではないのである。殊に市部檀家は百四十戸に過ぎず、他の百四十戸は四里も五里も離れた郡部に散在しているのであるから一戸々々訪問して廻ることは到底不可能であり、勧誘の中心は矢張市部であり、郡部は出狀その他による外はなかつたのである。

入行者内譯

それで入行者百二十六人の内譯は、
市部——九一人、郡部——一〇人、市内他寺院檀家——一五人。男——二九人、女——九七人。
となつてゐる。

又宗派別には大分部は淨土宗であるが、その中にメシヤ教の信者一、天理教の信者一、日蓮正宗の信者一、日蓮宗一、眞宗三、禪宗二、が含まれてゐる。

勧誘は一軒に必ず二回は訪問し、三回五回と強力にすゝめることが出来た結果、一軒の家から夫婦又は親子で入行せるもの八組、市部檀家百四十戸の中から一人あて入行して貰つたのが七十五戸で九一人の入行者を得たことは全く未曾有であつたと思う外はない。

又何うして入行させ度いと思う人には五月三日に開白し

てからでも毎朝八時までの間を自轉車で飛廻つて午前中に來られない者には午後から、午後が多用で來られない者には午前中だけと云うことで、前三月間が過ぎてから引するようにして入行せしめた者も五人あるが、その中の一人が日蓮正宗の信者である。勸誡は午前午後共に二回で一日四回であるが、五日間の法要次第は次の通りである。

五日間法要次第

五月三日（憲法記念）

午前九時、開白

十時、特別回向、稚兒行列

午後一時、太平洋戦争殉國英靈追悼法要

先代住職十七回忌法要

午後三時、基本金積立並に五重營繕感謝法要

五時、贈五重、三寶供養

五月四日（金）

午前八時、當寺開基以來總檀家先亡追善法要

十時、贈五重

午後一時、特別回向、稚兒行列

三時、贈五重

五時、三寶供養

五月五日（こどもの日）

午前八時、當山開基並に佛具寄進感謝法要

十時、特別回向、稚兒行列

午後一時、元祖大師七百五十年報恩記念御忌法要

三時、贈五重

五時、三寶供養

五月六日（日）

午時八時、現住職引導結縁諸靈位追善法要

十時、特別回向、贈五重

五月七日（月）

午後二時、結願、御禮禮拜

勸誡の内容

勸誡の順序、傳法の次第は從來通りであるが、その内容は從來のものと全く異つてゐる。稱名念佛が説かれてゐるのは一切經の中で觀無量壽經であるが、それは決して釋尊の直接の説法ではなく、滅後凡そ六百年を経過した世親の時代に成立したものであり、釋尊の大悟が稱名念佛になつたことが實に有難いと謂うのである。何故なら若し釋尊の大悟が大悟のまゝで止つて何等進歩することなく、稱名念佛することが出来なかつたならば恐らく釋尊によつて大悟せられた尊い佛教も終に一般民衆のものとなることが出来ず、或は亡びて仕舞つたかも知れないのである。

従つて觀無量壽經に説き明かされてゐる彌陀本願の稱名念佛は釋尊によつて大悟せられた尊い佛教がそのまゝ内容

となつてゐる許りでなく、その後にはける説法度生の一生の功德は勿論、實に完全なる人類文化の進みが一物をも餘すことなくそのまゝ結晶し、結實してゐるのであつて、眞に萬徳圓滿しその力を一切の上に具現して行くことが出来る。それは一方に於いては無限の智慧であり一方に於いては無限の慈悲である。眞に無量であり無限であり萬徳が圓滿してゐる。

法然上人のお念佛

法然上人のお念佛が決して限られたものでなく、上は天皇、上皇、后皇を始め奉り、文武百官、男女老若、海人漁人の區別なく、一切の人々が一人も漏らさず立派に救われるに到つた所以である。而かもその救いは何時でも何處でも、行住坐臥に時節の久近を問はないのである。念々稱名常懺悔であり一聲稱念罪背除である。念佛の聲するところそこがそのまゝ極樂である。このことは彌陀本願の念佛で滿徳圓滿の念佛であるから、それは當然でなくてはならない。

念佛の聲が自分の耳に聞ゆるということとはそれは確かに自分の心が聞いているのであるから、心は同時に二つのことを思うことは出来ない。一度その念佛の聲が自分の耳に達する時、今迄で利害得失だけに生き續け、得でないものを得だと思ひ込み、利でないものを利であると執着し、そ

のためにのみ罪惡を重ねて來た自分が、念佛することによつて佛の慈悲と智慧の光が心の窓近く差込んで來て、心の窓が開かるれば百年の暗室は一時に明るくなり、自分の今日迄の姿の淺ましさが恥かしく、一切の罪咎は跡形もなく悉く消失せて身心共に清淨無垢となるのである。

かくして前方便の一日が過ぎ二日が過ぎゆくにつれ、受者の身心は次第に淨められ清淨となり美しさを加えて行つたのである。又受者が唱える稱名念佛の聲も次第にその美しさを加えて行く。稱名念佛の有難さ力強さ尊さが誰人にも理解されたのである。

日課念佛の授與

そうして四日目の午後は、三日半日の前方便が終り、剃度式が行はれ、滿徳圓滿の日課念佛が受者一同に授與されたのであるが、受者は現實に何者にも比較されない智慧と慈悲の結晶である無碍の寶玉を受取つたのであるから、そのよろこびと力強さは實に限りないものが見受けられたのである。

五日目は午前が要偈道場であり午後が正傳法であつたことは申すまでもないが、既に四日目の午後に日課念佛が授與されてゐるのであるから、實社會に於ける規範としての白道の歩みは實に立派であり、自然であつたと申す外はな

(以下二三頁へつゞく)



童話を家庭へ

内山憲尚

一

家庭での母親や祖母の口から寝物語り（おねんね話）に聞いた話は、永久に心の中に焼きつけられていて、その人の生涯を通じて残るものであります。私など祖母や母から聞かされた十数の話を今でもハッキリ覚えております。

今日ではだんだん家庭でのお話が少なくなつて殆んど話さないお母さんが多くなつてゐる状態です。ですから日本の昔話や傳説も、今の子供は知らないようです。

二

今日の教科書には、神話は殆んどなくなり、昔話も舌切雀位がのせられており、傳説も一二のものになつてしまつてゐます。

小學校で話されないとすると家庭で話してやるより外はありません。日本神話や昔話や傳説には日本人の血の中を流れて生れて來た民族的な、なつかしい香があり味があるのであります。ですから正しい意味での民族教育となります。それに寝る時の静かな、なごやかな落ちついた氣分で、しかも母親の口から聞くというところに、情操教育があると共に、母の愛というものが、知らず識らずのうちに子供の心に浸み通るものであります。

三

お母様のお話は上手でなくとも結構です。子供は母親から上手な話を聞こうと考えてはいません。しかも、幼兒は童話を聞く場合批判的に受けとるものではありません。技巧など不要であります。ありのままに、ただ話を發表してやれば、それでよいのです。

方言で結構です。お母様方の生活してゐられるそのまゝの言葉で、よろしい。子供に童話を話してやるんだという氣持ちではなく、お互に話し合う氣持ちでいいのです。即ち「子供に語る」のではなく「子供と語る」のが本當の家庭に於ける童話の姿であります。

たしかにお母様の生活は忙しくなつたでしょう。しかし子供を寝かせる時位は落ちついた氣持ちになつて貰いたいものです。子供を寝かせ乍ら新聞や雑誌を讀んでゐるお母様には本當の母の愛がありません。

童話は決して専門家の話すものではなく、原則としてお母様が家庭で話すものが正しい姿であり幼稚園や學校などで聞かされるのは、家庭の童話から進展した形のものです。

童話を家庭へ！

童話を母へ！

（日本童話協會理事長）



子代曾根本 昔今場靈

熱海から東北へ一キロ、海を望見しながら、起伏の多い丘陵を、伊豆山へ抜ける裏山は、熱海にもこんな閑寂境があるかと思うほど、素朴な散歩道である。

源平の昔、蛭乃小島に流罪の身であつた青年頼朝が、伊豆山の僧房に預けた政子に逢いたさで、この邊りの山野を疾驅して行つたかと思うと、ほほ笑ましくなる。

信仰の篤かつた頼朝は、十四歳で伊豆に流されてから、非業の死を遂げた父義朝の菩提を弔うために、毎朝觀經をしなければ決して食膳に就かなかつたそう。將軍になつてからは、京都吉水の僧房に法然上人を訪ね、歸依したという半面、青年時代に加護を受けた伊豆山權現にも、夫妻は毎朝初詣を缺かさず、已むを得ぬ場合は必ず代參を遣わし、度々多額の寄進も怠らなかつた。

弘法大師が開山したという當時の伊豆山内には、七堂伽藍が建ち並び、夥しい僧堂が全山を埋めていたといふ。熊谷直實もその一坊で得度したと伝えられるが、壯嚴な伽藍も天正年間の兵火で烏有に歸し、今はわずかに伊豆山權現と般若院の、神佛それ〴〵一字を残すばかりの蜜柑山の樹間に、旅館や民家が散在している。

まことに「無常信迅速、刹那刹那移」といふ、人間世界の流轉を泌々思わざるを得ない。

伊豆山權現からさらに東へ雜木山をひとつ越えた中腹に、日支事變で陣歿した二萬數千の英靈を祀る興亞觀音像が、西向に安置されている。當時の最高司令官松井石根大將が部下の冥福を弔うため、戦場の土を持ち歸つて焼かせたという、煉瓦色をした陶器のみ佛の慈顔に、寂光のような夕陽がキラキラ輝いて、如何にも象徴的なお姿だ。

戦時中は宮様を始め、歴々の大官連はもとより、遺族や一般の參詣者が跡を立たず、興亞觀音の鎮座する伊豆山の名を天下にあげさせたが、今は毎月の祭日以外、見事な花の季節でもなければ、訪う人も稀れだ。

可成り急勾配の山道を登つて、本堂前の舞臺に佇つと、樹海に沈んだ谷々を越して、眼下に伊豆の山々に連なる曲浦長汀が、鮮やかな稜線を描き、はるか三里の洋上には初島が繪のように浮び心洗われる景勝の地である。

遠い大陸の涯てに散華した幾萬の生靈も、この山水の美を眺めながら、思いを遺族に馳せておられることだろう。まことにはかない。國亡びて山河ありで、永遠の佛道をしみ〴〵感じさせられる寂靜の淨土だ。

しかしこの靈山にも、浮世の風は用捨なく吹きまくる。軍閥の瓦解で、維持も困難だと聞くが、今は篤實な堂守の一家が不如意な山上生活に甘んじて、み佛に奉仕している。

先日、お花見がてらの參詣を終えて、清々しい氣分に浸つていた時、思いがけず物々しい警官が二三人を山に登つて來た。捕物かしらと、ちよつと胸をどきつかせたが、聞けば、本堂裏手の銅板を、前夜何者かに全部剥ぎ奪られたことを訴えたためであつた。

さまざまの現實の相をみ佛は如何に導いて下さるだろうと考えつゝ、山を下つた。

生ける念佛行者 宮川翁



辻 昌 瑞

①

宮川翁とは、知る人ぞ知る、知恩院の朝參會々長たる妙好人、宮川孝三郎さんの事である。祖山の朝時の輪番布教に奉仕された方であるならば、どなたでも御存知の筈である。その大聲の念佛には、初心者もタヂ／＼とする位であろう。此の翁について、私には忘れる事の出来ない程の大切な思い出が残っている。それは一昨年の四月初旬の十日間、久しぶりで四日目かの祖山輪番布教に參らせて頂いた時である。三、四日経つた或る朝、お説教を終つて、朝參會の人々と共にお茶を頂きつゝ、四方山話に花が咲いてゐる時、會員のA氏が、

「私は此の朝參會に仲間入りさせて頂いてから約五年になります、御承知の通り、昨今は色々の新興宗教が、次

から次々と流行り出しまして、實は私も親類の者や知人から、知恩院サマも結構だが、一度こちらの神様えも参りなさいよ、一邊あちらの佛様えも参りましょうと毎日のように誘われますので、實はそれを斷るのにホト／＼閉口して居りますよ。」

と笑いながら何氣なく話し出される。すると最近、老齡のため大分に耳の遠くなられた宮川翁は、此の話にニコ／＼顔で耳を傾けて居られたが、やがて靜かに茶碗を下え置きつゝ、

「ハ、貴方、そりや未だ貴方のお念佛が足りないんですよ。本當のお念佛が、未だ申されていませんよ。」

と實にハッキリと申されるではありませんか。翁の溫顔に似合ふ鋭い言葉であり、思い切つた自信である。此の一言は、なか／＼一朝一夕に出るものではないと思つた。餘りにもハッキリとした言葉に相手のA氏は少しムツとして、

「何故です？ 何かよい方法はありますか。」
ニコリした翁曰く、

「未だお念佛が足りませんよ。そうでしょう、ね、考えて御覽なさいよ、私達は凡夫の身です。私達が毎日拜んでゐる阿彌陀様お一人えの御給仕でさえ、朝夕充分に出来兼ねるではありませんか。思えば勿體ない事です。然るにア

チラの佛様、コチラの神様と拜んで見たところで、どうして最後まで一貫して御給仕が出来るものですか。私には出来ないと信じます。つまりそれは凡夫の一時の出来心であつて、實は神や佛にウソをついておるのと同じです。どうぞ阿彌陀様一佛の信仰になつて下さい。ですからもつともつとお念佛を申して見なさい、キットその迷い心は消えますよ。」

此の力強い信念の言葉は、知恩院の朝参り三十五年間の體驗者、八十翁の善男子たる宮川さんにして初めて言える事である。お茶を頂いていた一座の人々も「成る程」と頭を下げた次第、此の尊き「念佛の行者」宮川翁に對して、思わす私も合掌して、涙の出るほど感激を覺えたことである。

②

では、次に翁の生立ちや「念佛行者」としての動機について、少し書いて見ようと思う。翁は私達と同郷の人、昔の近江商人の發祥地と言われる滋賀縣神崎郡五個莊町出身、本年數えて八十歳、近年とみに白髪となり、耳も遠くなつてお説教の時には、補聴器を使用して居られるが、老來いよ／＼元氣で壯者をもしのぐ健康體、デブブリした翁の體格から稱えられる大聲のお念佛は、蓋し知恩院の名物の一つ、正に朝參會のよき會長であり、尊いリーダーである。

翁は幼少十二歳にして志を立て、故郷を出で、京都の吳

服太物店え小僧として住込み奉公に上られたが、若い時代から腦が悪いために頭痛症には一方ならぬ苦勞を重ねつゝ、あらゆる治療や藥品を試みられたが思わしくなかつたそうである。そこで、たま／＼一機一轉して自然療法を始められたのが、朝参りのそも／＼の直接動機だつたと言われる。朝早く起床して、町々の俗塵を離れたすが／＼しい東山地方を歩みつゝ、新センなる朝の空氣を思ふ存分に深く呼吸することが、翁の頭の治療のためにも、又、身體のためにも一番のクスリとなり、やがて日課となつてしまつた。

そうして知恩院えの朝参りを發心されたのが、大正十二年の春からと申されているから丁度かれこれ三十五年位になるわけである。承れば自來、雨の朝も風の日も、一年の内、三百六十日までには參つて居られるから、殆んど毎日缺かさずに參られる事になる。只正月の三ヶ日位を休まれるらしい。私達は、とかく口では言い易く筆には書き易いが、いざ實行となれば何でも如何に難しいかをよく知つてゐる。善い事だと分つていながら、成さねばならぬと知りつゝも、實行出来ないのが、私達凡夫の日々の悲しみである。かゝる難行中の難行を敢えて實行される所に、宮川翁の尊さを味合い度いものである。

かくして早起きの實行、朝の新しい大氣の呼吸、殊に朝参りに依る信念の増長、元祖法然上人の御教による安心、更に大聲の稱名念佛、此れ等が翁の唯一の療法であり、且

つ楽しみであつた。お蔭さまで心身共に健在で、法悦の中に今日まで長生きさせて頂くことが出来ましたと翁は喜んで居られる。

私は不徳ながら、いつも「念佛の信者たらんよりも、念佛の行者たれ」と言つて御願ひしているが、宮川翁こそはそのよき手本だと信じてゐる。翁の三十數年間の努力こそよく信行具足の相を物語つていゝと言えよう。元祖法然上人の常の御詞にも「一丈の堀を越えんと思わん人は、一丈五尺を越えんとはげむべし」と申されているが、翁の言行に相當する所が見出される。更に御法語に「名號を聞くと言ふとも信ぜずば聞かざるが如し。たとい信ずと言ふとも唱えずば信ぜざるが如し。只常に念佛すべきなり」とあるが、念佛行者としての翁はその實行者とも言い得よう。よくも續け給ひし三十有五年間の朝参りが、今も尙、壯者としてのぐ八十翁宮川孝三郎氏の生ける信仰であり、長壽健康法であり、人生である。

翁の御令室は只今六十八歳にて御健在、四十歳になられた令息が、翁の家業を繼いで慶弔衣裝の貸屋を営みつゝ、一家念佛相續の中に平和な法悦生活をして居られる由である。去る四月廿三日知恩院御忌大會中の朝時の大殿布教に参らせて頂いた砌、久々で翁にお目にかゝりその御健康を喜び合いました。御法語の中に「大念は大佛を見る」と示されてゐるが、正に翁こそは、不斷の信仰と大聲の念佛によつて、大阿彌陀佛に攝取され給うたのだ。翁こそ安心起行の念佛者、信行具足の生ける念佛行者と言えよう。

——合掌

(總本山知恩院布教師)

(十八頁よりつづく)

い。必ずや今後の實生活に於いて立派に白道が踏まれて行くことゝ思う。自分も又此後受者一同が必ず歩いて呉れであらう白道の第一線に立つて間違なく歩み續け得ることを確信するに到つたのである。

午後の正傳法は唯々感謝であり感激であり、現實に極樂は斯の如きものであることが理解し得られたことゝ思う。勸誡師の美しい崇高な姿を、それに幾倍する崇高な美しい十念の聲とが永遠に私達の身心を洗い淨め盡して行くであらう。

淨泰寺五重講六日會

受者一同に對し日課念佛が授與されたのが五月六日であるから、此の日を記念して五重講六日會を結集し、檀徒一同と共に、白道の歩みを續けて行くことゝする。

☆

☆

☆

☆

ホノルル通信

第四信

ホノルル浄土宗別院にて



松 濤 弘 道

日本の皆さんは今頃どう過しておられますか。前回に、日本人には誇りが缺けているという事に觸れましたが、では何故その誇りが缺けているかももう少し廻のぼつて考えてみましょう。私はこの原因を色々考えてみました。そのうちこれに最も近いものに「恥しさ」が掲げられると思われます。即ち「羞恥心」が誇りを抹殺しているとも云えましよう。勿論西洋人の中にも恥かしがり屋がいる事は居ますが、概して日本人の方に多い様に見受けられます。

或る心理學者はこの「はじらい」の心理を「みられている感」と説明していますが、日本人にはこれが、第二次性徴である性（セックス）に關係なく働き、例えば人に接するだけでも、顔や動作に「はじらい」の感情となつて表われる様です。特に西洋人に我々が接する場合に、彼等は透き通つた碧眼で我々を正面に凝視するのが常です。この様な時日本人は眼をそらすか、俯向いてしまうのをよく見かけます。はたしてこれが日本人の「はじらい」に起因するのかどうか、決断する事は出来ませんが、此處では一應その様に考え

ながら話を進めて行きたいと思ひます。

ベルギーの心理學者ニュタンはこの「はじらい」の心理を次の様に説明しています。即ち「自分の心が親近感をもつて感じられる部分の時にはおこらないが、一端公的な場になれが露出されると、自分の心がのぞかれた事により、それを防禦する爲に「はじらい」の感情をもつて内心を覆うのである」と。

日本人には、この羞恥心を成立させているものに、劣等感、罪惡感、破廉恥が掲げられます。まづ劣等感について考えてみるに、これは客觀的には何等根據のないもので、主觀的な劣等感から生じた產物です。自分の精神的、肉體的缺陷を過大視し、他人より劣つてゐると獨斷する不安の感情がこの劣等感を生ずると一般に云われて來ています。常に自分の考え方や行動に自信が持てず、行動の基準を持つていないから他人の事が氣になるものであり、特に日本人には歴史的にみても東西文明の接觸するつぽに投ぜられて未だに日本人獨自の主體性が確立されていないので、この民族的な不幸が、或はその劣等感をかくす優越感となつて表われたり、或る時は西洋文

明に追従して自らを劣等視したりして今日に至つていゝと思われまゝ。熱し易く、さめ易い日本人の氣質もこれに拍車をかけている事も見逃せません。

罪惡感についてフロイドは「我々は自己の中に取入れられた社會の慣習、規準、道德が超自我を形成しているのであるが、これが本能に動かされて慣習、規準、道德に背いて勝手な行動をしない様に監督しているのである。

そして一端この本能が動き出した時に超自我はこの行動を阻止しようとして動き出すのであり、本能に支配されているものを自我と呼ぶならば、これが罪惡感を感じるのである」と説明しています。

日本人は西洋人の考へている様な絶對的な道德律に支配されず、比較自由放任生活を營んで來ていますから、こゝで云う罪惡感を神に委任する事も出來ず自分で背負ひ、自分で處理しなければならぬ運命にあります。

ところが自分たるや、自信の持てない自分ですから余計、それが「はじらい」となつて表われて來るのです。

最後に破廉恥についてですが、過去と世間に負目を感じている自分がその義理に縛られそれに萬分の一の思返しも出來ない時に「恥」の感情となつて表われると考えられます。

日本人がよく感謝の意志表示をする時使う言葉に「すみません」というのがありますが英語の「サンキュー」の代りに「アイ・アム・ヴェリ・マッチ・オブライジド」に當る、即ち他人の善意の賜物に感謝する以上に、その恩に對して義理を返せないで、不面目であり「はづかしい」と云う事に他なりません。この「はじらい」は自分がそれを受けるに値しないのに與えられたと云う、即ち「私は侮辱された」という「恥」の觀念となつて表現されるのです。日本人はよく「その本分を知れ」と古來から教育されて來ている様に、上下、主従關係で、縛られているので、その秩序が「恥」と云う防禦策によつて保たれているとも云えましよう。「恥を知る人」が、したがつて徳の高い人であり良心の潔白を表わしているのです。日本人の生活に、この「廉恥心」が高い地位を占めている事は、各自が自分の行動に對して絶えず世間の目に氣を配る事を

意味し、それに對して他人がどう云う判斷を下すかという事に自分の行動の中心があるのです。ですから自分の信念に基づいた行動が出來ようはずがありません。

此の様に劣等感、罪惡感、廉恥感が混然一體となつて日本人の「はじらい」の感情を形成していると結論せざるを得ません。

はたしてこの「はじらい」の心がある事が良い事か悪い事か、その價值判斷は此處では出來ませんが、これが、日本人をして禮儀正しい民族に仕立て上げた事は否めない事實の様です。人より一步へり下り、謙讓な人は何處の國でも尊敬されますが、日本人の場合それを通り越えて物云わぬ第二の眠れる獅子になる様子がありありと目に見える様です。

何が日本人を「はじらい」の多い無氣力な國民にさせたか、それについては議論の余地がありますが、その一つの方向づけとして個性の缺除が考えられると思いますので次回にはそれについて少々言及したいと思います。

(さようなら)

*

*

*

尾陽の産んだ

名僧の数々



大 橋 俊 雄

「一人出家すれば九族天に生る」といはれるほど、佛教信仰の篤い尾張には、古往今來多くの名僧知識が輩出したけれども、教團に布教にと活躍して宗門に勇飛するようになったのは近代に入つてからの事であつた。曹洞禪や眞宗東本願寺の教團が相當鞏固な基盤をきき上げていた、その後をおそうようにして、展開をこころみたのは明治以降において目ざましいものがあつた。前増上寺大僧正大島徹水上

人は尾參兩國で最も念佛の隆盛であつたのは明治十年代であつたとして、

尾西には現有に人あり。尾東には鳴海山に生涯不臥の隱遁者亮光上人あり。三河には昌光寺の志運律師、大樹寺の説門僧正、荒井山には求道德演上人、貞照院の誠憧和上あり。東三に悟眞寺山田僧上あり。此等の龍象林の如く其の地に割據して、大いに教線を揮ひ、尾三兩國の念佛の隆昌なる、この時を以て最とす。此の頃在家の信者中、此等諸師の教化に浴したる者の中、田畑の耕作に従事する間は、珠を手にして念佛を數ふること能はざるを以て、土地の大小によりて日課となせる念佛の數を計算せし者さへありしと言ふ。以て其の盛なりしを知るべし。

と述べて居られるが、實に前代に於て尾張に念佛の聲盛ならしむるに、あずかつて感化力の大であつたものは雲介子關通上人ではなかつたらうか。

明治元年（一八七七）有信の蓮友の請を入れて、建中寺の行阿大基によつて撰述された「尾陽往生傳」には、尾張生れの往生人を僧俗合せて五十七名のせているが、その中淨土宗の僧については下巻に最譽上人以下十九人の往生人につき奇瑞に富める略傳を収めている。淨土宗史の上に其の名を留める尾張生れの僧は近世前期には非常に乏しく、後期から近代に入るにつれて漸く増し、淨土宗典籍に脱誤

の多いことを慨歎してこれが校訂を企てた金勝阿彌陀寺の信問（一七五五——一八二〇）は海西郡大成村の人であり顯密大小乗の諸教を南郡北嶺野山東寺の諸寺に究めた學匠岱眞（一七九四——一八四六）も名古屋に生れて人となつた僧であるが、それにもまして全尾張に念佛勸化した行者は關通上人その人であつた。

關通（一六九六——一七七〇）は愛宗護法の念極めて強く、當時の淨土宗が香花御宗門とて深き優遇を受けてより以來、宗侶の多くは奢侈を好み、香衣の色を誇り、殿堂又美を競うようになつたのを、慨歎して、専ら念佛の一行を修し、質素清洒な宗風をおとすことに心をくだかれたのであつた。上人の足跡は關の東西にあまねく、その勸化は四十八ヶ年にも及び、その流れは後世關通流と呼ばれるまでに發展をとげたのであり。實に彼が尾張の淨土宗にあたえた清新の氣は大きく、中心道場は一色圓成寺であつた。關通流は捨世流儀の一派で、芳躰をしたつて門に入るものも多く、「得度の僧尼千五百餘人、受戒するもの三千餘人、課佛誓約の男女千萬餘人」にも及んだといわれている。

その中に畫僧月僊（——一八〇八）がいた。彼は名古屋に生れ、十歳で關通の門に入つたけれども、東都に遊學し増上寺に掛錫の傍ら、ひそかに櫻井雪館に繪を學び、更に師を求めて上洛し、廣く元明の畫道を探り、蕪村や應舉の遺風をしたつて新機軸を開いた異型の僧であつた。又唯識

俱舍を學んで勸學講院の教授となつた龍成（一八三一——一八七三）も關通の德を慕つて淨土宗門に入つた僧で、海西郡赤目村の人であり、又勸學講院の創立につとめて後進の誘掖の舉を起し、東西學林のしやをつくつた秦義應（一八三四——一八九〇）も亦名古屋藩士の家に生れた。この人は後に増上寺七十四世の法主となられた高僧であつた。

この頃から、尾陽にも名僧、特に學僧の輩出は次第に多く、めざましかつた。同じく宗門子弟の教育に心を用いて明治三年自から進んで淨土宗の教費を東西の兩都に設立せんことを首唱して、前後十餘ヶ年に亘つて講席を張り、學徒を訓育した大布教家岸上恢嶺（一八三九——一八八五）も名古屋に生れた。此等教育の影響は自然郷黨の文化にも何等かの影響を及ぼすことは必然の理りで、その甥に當る椎尾辨匡博士は増上寺法主、大正大學長、共生會師表として壯者をしのぐばかりに思想善導のために活躍されて居られる。殊に宗學界には數多くの人材を出したのである。即ち神谷大周、勤息義城、大鹿愍成、加藤秀旭の諸師を始め近くは石井教道博士も皆尾張の産んだ宗乘學者であつた。神谷大周は名古屋市永安寺町に生れ、維新時における廢佛棄釋の暴舉に當つて護法樹立のために力盡くした僧として著名であるが、宗學についても一見識をもつていた。そのため傳法なり、聖問教學についての態度に關して意見を異にしていた勤息義城とは屢々論争に及んだけれども、その

論敵義城師また丹羽郡榮村の出で、同郷のくしき因縁に結ばれた兩師は宗學上の諸問題について論戰を交えた。又それだけに宗學に就て關心をもつ者も多く、進歩發展も見られたのであつた。勤息師の「傳語金鑑論」は行誡上人の傳法改正論「傳語」を破斥したものであつたが、時に神谷大周は「結縁五重答蹄」を以つてこれに答え、行誡をたすけて大いに固執し、後に、「傳法沿革依憑筌考」を著はした時にも、勤息義城はこれに一矢をむくいたものであつた。

勤息師は明治時代に於ける宗學の最高權威者として黒田眞洞・大鹿愍成と並んで三勸學と呼ばれているが、其の中大鹿愍成（一八五七——一九二五）も亦、海東郡越治村宇治の人で、宗教大學長を経、安土淨嚴院から選ばれて、黒谷本山金成光明寺に進董した人である。その後同じく宗學の研究のために一身を捧げ、「淨土宗綱要」を著はした加藤秀旭（一八五七——一九二五）も海西郡東市江村の出であり桑門秀我も一時三河昌福寺に住したことがあつた。現代宗學の泰斗で、選擇集の研究を大成し、昭和重修法然上人全集の大業を遂げ、尙孜々としてうむことなく「法然教學の思想史的研究」を畢生の研究をすすめて居られる石井教道博士も尾張一の宮在、葉栗郡太田島村の出であり、由來尾張には宗乘に志さすものも多いのである。

又徳者としては、關通上人を私淑して百萬信徒、八千寺院をはじめ佛教各宗の長老として、「生き佛」としてこの

世の尊敬を一身にあつめ、百三歳の長壽を知恩院に全うして世を去つた山下現有（一八三二——一九三四）も中島郡赤目村の人があり、布教に一身を捧げて日本から韓國に至るまで、足跡をのばし得た増上寺七十七世堀尾貫務大僧正（一八二八——一九二一）も名古屋の出身であつた。同じく近世における布教界の權威を以て自他ともにゆるし、各地に周遊して化益をたれ、一宗の興望をになつて淨華院七十一世に進んだ大野法音大僧正（一八五六——一九三一）も亦海西郡市腋村の人であり、青民遺書をのこし、信仰の復活と祖道の復興を期し、年齒若干にして逝いた原青民も海東郡に生を享けた人であつた。

以上尾張の産んだ名僧知識について述べたけれども、高僧とか名僧學僧とか云はれるものは、全淨土宗門から見た場合には氷山の一角にしかすぎない。淨土宗の教團に生をうけた幾多の僧侶についても、當然考えて見なければならず、ましてそうした名もなき一僧こそ、尾張の淨土宗、否全土宗門のいしすえをきすいた人であつたことを思い合はせなければならぬのであるが、惜しい哉、其等の人には傳記らしい傳記の片鱗すらのことされて居らないのである。

（大正大學淨土學研究室）

×

×

×

×

祖 法 然 上 人 の 歌



澤田岳潤

は し が き

祖法然上人の歌に就て、こゝに、さゝやかな讃仰を捧げたいと念じて、この小稿に筆を染めました。

もとゞ歌に就ての専門の知識もなく、また特に法然上人の歌に就ての教養も研學も乏しいのですが祖恩謝徳の一端とも志し又近く七百五十年御恩忌を迎えんとする、その記念ともと發願しての小論であります。

云うまでもなく祖法然上人は遠い過去の人で御往生後七百五十年祥當が昭和三十六年に當る既往の人ですが、その八十年の生涯に於ける遺業としての淨土門の開宗など誠に尊いものですが、この小稿では上人の生涯に創作せられた歌の面に就て讃仰せんと欲するもの

です。

かく法然上人は過去の遠い人ですが、その生涯に於て心の花として、創作せられた歌は今も尙人の心に、みづ／＼しい、ほの／＼とした感銘を與へて止まないのです。

上人の生涯八十年の心の花は、いつはりなき上人の自畫像であり又自ら彫られた彫刻そのもので今現存の人間として、その歌を拜するごとに感ぜられます。

ことに今日の如く終戦後十年、道義のみだれ、たゞしからざる信仰のはんらん、こうした今日の現實の世界に於て、心の灯とし、たましいの淨化として祖法然上人の歌は、はげしい人間生活の上に香り高い藝術として不朽に輝きつゝあります。

もつとも上人の如く偉大なる凡人として人間の悩み、隣人を愛せ

んとして仲々に眞實に愛し得られない人間生活の苦悶に徹見して信仰生活に轉向せられた、その人の心の底から創作せられた歌は、今日の現實の人間に、うるおいを持たせ、ゆとりを與へ、おほらかなものを内蔵して止まないものがあります。

こうした意味に於て法然上人の歌は淨土教特信の人々の専有物でなく一般人類の心の糧として重要なものと思う、また宗教史盛衰の道程から考へて、よしや上人の信仰が埋藏される不幸の日が到來しても上人の創作せられた歌は人類のあらんかぎり永久に、その價值と存在は認められるに相違ない。

いや法然上人の信仰は末法萬年彌陀一教とまで、その存在を證せらるるのであるから、その上人の歌も永劫に輝きましよう。

みそらに輝く星の落つる事あるも、わが胸に燃えし心の花は、どこしえに消えないと歌つた詩人の詩の如く法然上人の歌は、さちにおう言だまの花として人間生活の光と鹽となつて、その生活に一段の光彩を與へて止まないものと信じて疑はない。

かく信念のもとに上人の歌を讃仰し思慕して、この筆を進めたいと念願して、この小稿に秃筆を呵した所以であります。

天成の歌人

祖法然上人は世に云う歌人では無かつたが折にふれ事に際して歌を詠まれた。

人間思想の所有者として誰か詩歌を創作しないものはない、鳥唄い蛙鳴く、これみな自然の歌であり詩である。

法然上人の傳記辭典ともいわれる「法然上人行狀畫圖」略して勅修御傳といはれる又勅傳とも傳へられる中に上人の歌がある。

その歌の卷頭に

「上人やまとうたを事とし給はざりけれども、わが國の風俗に隨て、法門によせては、時々おもひをのべられけるにや、或は門弟の中に、しるしをけるを申つたへ、或は手づから書付給へるを没後に披露しける」とあつて、上人は歌を創作されたるも、しいて歌題をもつて歌を作るとか歌會に列して歌作に熱中せられた事は、ほとんど無かつたと考へられますあまたある上人の傳記を見るも歌道を修學されたとか又専門歌人に就て歌學の指導を受けられかたとか云う文献は見いだされない。

この點を見ても他の高僧大德が幼年時から歌道の啓蒙を受け、したしく歌作に没頭せられたとは自ら相違した事實であつて、まつたく自然流露の天成歌人でありました。

いきおい法然上人の歌の數量は極めて僅少であつて前記の勅傳其他の傳記に就て見るも二十首をいでない數量であります。

上人生涯の歌が二十首たらないとはいへ、その内容に於ては質的に大きなものが含まれています。

また法然上人の歌と傳へられている眞疑未詳の歌など百餘首あり玉林和歌集にある法然上人「いろは歌」などありますが確とした史實の裏付は乏しいのですが上人の生活と思想が、よく表現されていて、ある意味に於て法然上人の眞實なる歌と考へても好いかと思はれるのですが、それは又他日の稿に筆を進めたいと思う。

上人眞作といはれる歌數が二十首たらずといへば歌人としては誠に量の少ない寡作家と考へられます。然し眞實の問題は量よりも質であります。

詩人となる一篇の詩にて足れりと言はれる如く歌人としても一首あれば、その人の歌に就ての價值は充分に知り得られます。

かく上人が歌人として寡作家でおはした事は、まづたく抜巧を持たない、心の底の溢れる情念に動かされての創作であつて、この點など唯の歌人とは異なつた性格で、まづたくの自然發露の天成詩人であり歌人であると考へられます。

天成の歌人であり自然の歌よみであつたとはいへ法然上人在世時代は歌道の黄金時代ともいはれる時代であつて幾多の勅選和歌集も選出され歌人も西行初め定家、長明、慈珍などあつて、その影響を與へられた事は云うまでもなく、また特信者であり水魚の交り深い藤原兼實公なども又有名な歌人であつたから、その影響を與へられた事と考へられるは自然の理であります。

また、その歌數の僅少ななるは歌をもつて教化の具とせられなかつた、天成の自然歌人であつたから強いて感興も起らないのに歌を創作せられなかつたらしい。

他の高僧大德が信仰の導きとして傳道弘法の教材として歌を詠まれたが上人は決して歌をもつて教化の材との意志は無かつたと思はれます。

雲の悠々と流れる、自然の恵をあびて花の開く、くまなく月の輝く、その自然美を感興の浮ぶまゝに自己の信仰生活と詩的感情の合

一を見いだされた、その中に歌を創作し表現されたのが法然上人の歌であります。

また、その底を流れる一味の法悦が、あふれでて、おゝらかな、しみんとした上人の眞諦がふくまれ、その體臭さえ感得せられて目近に上人を感得する靈感にふれるのであります。

その歌の性格

法然上人が歌を創作されたは單なる歌人の花鳥風月や人間喜怒哀樂の感情を表現されたのでなく又人を教化せんとして詠まれたのだなといと前述しました。

たゞ法悦のあふれ、信仰の一味を三十一文字の詩形である歌の形式をもつて創作されたのであるから、その歌の内容、性格、態度が異なつてくるは必然と考へられます。

ひとり法然上人といはず高僧大德の歌は、その内容性格の異なるものが發見されます。

傳教大師が比叡山延曆寺建立にあたり

阿耨多羅三藐三菩提の佛たち

わか立つ柚に冥加あらせたまへ

また弘法大師が

わだつみのこぎゆく船のあとみれば

のうもう三まんだあびらうんけん

など佛教専門語を大膽に表現された歌を見ても沙門特有の歌であると思はれます。

法然上人の歌に就ての態度は勅傳の卷二十二にある百四十五條の中に

「歌よむは罪にて候か、答、あながちに得候はず、たゞし罪ともなり功德ともなる」

と上人は歌に關して罪と功德の二面を見たまい、ひたすら功德の歌を創作されました、その生涯の歌は、みな法悦功德のあらはれであり讃佛乘の因縁とせられました。

いきおい法然上人の歌には、その歌の性格中心となる用語が佛教的と云うよりは淨土の信仰を吐露せられた口稱念佛の體驗を表現の字句の多くあるは、ひとしほに上人の金剛不壞の信仰と法悦心境に感激せられます。

いま法然上人の歌の中に於て信仰主體念佛中心の歌を摘記しましょう。

千歳ふる小松のもとをすみかにて無量壽佛の迎えをぞまつ

阿彌陀佛と申すばかりをつとめて淨土の莊嚴みるぞうれしき

われは唯佛にいつか英草心のつまにかけぬ日戸なき

雪のうち佛のみなを稱ふればつもれる罪もやがて消えぬる

阿彌陀佛といふよりはかは津の國のなにはのこともあしかりぬべし

極樂へつとめてはやくいでたゞば身の終りには集りつきなん

阿彌陀佛と心は西に空蟬のもぬけはてたる聲ぞ涼しき

往生は世にやすけれどみな人の誠の心なくとこそせね

阿彌陀佛と十聲となへてまどろまん永きねむりになりもこそすれ

つゆの身はこゝかしこにて消えぬとも心はおなじ花のうてなぞ
柴の戸に明けかゝる白雲をいつ紫の色に見なさん

これを見んをのゝごとくに思ひでて南無阿彌陀佛と常に稱へよ
これ眞作十九首と傳へられ中の十二首であつて、その往生思想、淨土欣求の信仰、念佛相續の結晶の表現が強く歌の内容に潜まれ、法然上人の根本思想が立證せられます。

かく佛教思想の、あまりに溢れている事から一般歌人は道歌釋教歌として尊敬するも文學藝術としては、あまりに教訓的で教化、説教の内容が深く存在していると、やゝ敬遠されがちである。

それは専門歌人と宗教者との思想の相違で、その心構へが自ら歌の内容に表現され、それぞれの個性が發揮せられ。そこに藝術としての不朽の價值が発見せられるのであります。

道歌といへば頓知頓語めいて、その代表とも考へられるは一休禪師の歌であつて、あまりに理智的で文學としては第二義的の創作であると歌人一般は見えています。

それは歌の形式が短詩形であつて大宗教家が信念を吐露するには短文に強制せられて自己の思想を發露するには不自由であるばかりでなく、みづからの心意を表現するには、あまりに高遠なので主觀の感情を雲間に、ちらと月光のきらめく如く、その思想のひらめきを、相觀の情懷を端的にあらはしたものと信ぜられます。(つづく)

浄土シリーズ

大野法道著

五重の話

- ★……四頁一部二圓、……☆
- ☆……百部以上一、八……★
- ★……圓、三百部以上……☆
- ☆……一、五圓 送料……★
- ★……五十部毎八圓 ……☆

本宗入門の式である大切な五重とは何にか、何を傳へどんないみがあるのか、大野博士が特に平易に解説されたもの。

法然上人鑽仰會發行

後記

○五月は雨が多く鬱陶しい日が續いた。毎日雨具に身を固めむん、とする満員電車で揺られて往來する人々のなげきもよくわかる。然し、車窓に映ずる五月雨にうたれた緑の樹木は、愈々美しい光彩を放ちみずくしい。自然の草や木は梅雨の中にすく／＼と生長を付けている。

人間のたましいも、きつと苦惱の中に成育され、いのちはみがかれることであらう。けわしい道をたどっている本誌に、進む力と勇氣を自然はシサしてくれる。

○佐藤密雄先生の御母堂が御逝去なされた。小雨降る五月廿三日事鎌倉の著名な人々、大學の先生、本誌より眞野、佐藤、竹中等の諸先生方あまた参列のもと盛大な告別式が営まれ佛の生前のお徳が偲ばれた。佛におくられた高濱盧子先生の一句。

み佛の涙卵の花腐さし雨。

○過日、正大の研究室に佐藤賢順佐藤良智、竹中の三巨頭相集い會談すること数時間、問題の中心は浄土の現在と未來のことであつたらしい。

○七月號は、絃二郎先生の追憶特集、編集子は部屋に居ることなく、専ら外出にて甚だ多忙。(宮林)

○梅雨のしめつぽい季節の中で、氣の早い商業界は新聞、ラジオにお中元の廣告を出し始めた。お中元と聞くと一層暑さが強く感じられる。支那では中元に月宮殿の女神にユアンシャビンと云う菓子を供えるそうだ。

○その暑さ中に、東では東京で臨時宗議會が八日に、西では名古屋に於て第二回浄土教學大會が九、十の兩日に亘つて開かれる、この二つ關係がない様で關係がある。

○本誌關係の諸先生、そろつて教學院の理事、その爲か編輯部最近ちよつと忙しい。

○本誌の特集編集、一月の宗祖號より回を重ねて、本誌は五重特集でございますが、この邊で皆様のお感想、御注文、その他諸々をお願いいたします。

○業務の手違から前金切の通知が大部遅れておりますことをお詫び致します、恐縮ながら本會會計面の事情を御察し下され折返し御送金願います。

○八月號の暑中見舞廣告には會員各位の御参加をお待ちします。

(水谷)

會費(誌代)

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手數料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「浄土」 六月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十一年五月廿五日印刷
昭和三十一年六月一日發行

(定價三十圓)

編輯人 竹中 信 常

發行人 佐藤 密 雄

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京都品川区上大崎一ノ七八三

發行所 法然上人鑽仰會

電話 東京八二一八七番

特價奉仕

一、寺院用佛具類一式

一、在家用佛壇、佛具一式

多少に拘わらず御用命或は御紹介下さい

東京都江東區深川三好町一ノ五長專院不動寺脇

區役所前

正本堂佛具店

電話深川(64)五八四八

團體宿御案内

一、當寺本堂庫裡再建完了しましたので五十名位までの團體宿泊を實費で引受ます。

東京都江東區深川三好町一ノ五區役所前

長專院不動寺

正 本 實 乘
電話深川(64)五八四八

幼稚園 保育園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にのモットーで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松宮・光明・芝・明照等の浄土宗幼稚園採用。



篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)

銀ブランコ2人乗	¥ 13,000
銀ブランコ3人乗	¥ 15,000
銀ブランコ4人乗	¥ 22,000
銀ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
複式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報カタログ送

配達實費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)

組立説明書送付